

論説

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ

の繪畫を論ず

南郊野 人譯述

(一) 畫家及び作品の性格

吾人の棲息する現代は、世路日に峻に、人事年非なり、老人は多年の思想の畫餅に屬するを浩歎し、識豊に齡熟する者は、利を營み財を聚むるにのみ汲々とし、多望の青年は未だ歩をはじめざる以前に、早く既に生活の疲倦を訴へ、志を立て業を勤むるの徒勞なるを揚言す、懷疑の説は實に全般の思想界を支配したり。此際非凡の一偉人生して、巍然として濁流の間に挺立し、勇氣と忍耐との好模範を示し、久しく俗流の攻撃批難を凌ぎ、最も正當に且最も眞實なる名望を負ふに至りたる事蹟を叙述して、我現代は厭苦の聲高きに拘はらず、能く德行を了解し讚賞すること忘れざる適例を示し、世の全く澆季に墮落し果てざるを證せんは、熱鬧場裏に沈吟する人の心を和げ慰むるに足ることを信ず。



筆ナボ 像肖ヌシャヴァンヌ・ド・ス・ヴ・ピ

は、天然と人生との快活なる概念にして、ルアン博物館の「藝術と天然の交感」は、審美哲理の高妙なる綜約なり、ボアチエリ市廳にある女聖ラデゴントの圖は、優秀清婉なる理想的淑女の極致を示す、此他傑品傑作一々數ふべくもあらず、其ボストン府圖書館の囑に應じたる、「歌曲の女神光明の天使を迎ふる」圖、及びパンテオンの第二の壁畫等は終末期の所作に屬す。斯る廣大豊饒なる美術家の一生を現出し、頽齡老衰の跡なきのみならず、其作は却て益々新鮮に益々勇健の氣力を加へたるを、古來絶えて其例を見ざる所にして、是れ當に佛國の榮譽となるのみならず、現代美術の偉蹟として永く後世に光りを遺さんことを疑を容れざるなり。

今は故人となりし佛國新派の首領なるピュヴィス・ド・シャヴァンヌ氏の名は今日宇内に轟きて、其大作は佛國の内外にあまねく、苟も美術を口にする者は、其名を敬慕し其作を讚稱せざるはなし。先づ巴里府にありてはパンテオン内部に女聖ジュゼフ・エヴの幼時を叙じたる壁畫、ソルボンヌ講堂に張りたる大畫幅、又は巴里市廳の大階段を飾る裝飾畫に、高尚幽遠なる靈能と豁達の氣格を顯し、マルセイユ府ロンシャン博物館の雙額、又其郷里なる里昂府美術館の、「太古の幻影」及び「神林」は、彼が考古の偉想を彰はし、アミアン博物館の「平和」、「戦争」、「労働」、「休息」の四幅

此の如き經歷を有し、至高の理想を腦中に貯へたる大美術家の容貌は、端正沈重すべからざる威嚴あるに反し、其行は小心翼翼、人に接して多く語らず、然かもよく諄々として温厚の美質を洩らす、曾て人に向つて言へり、「余は全く情性的人物にして複雑なる理論家と正反對なるを以て、審美的意識を開示するは頗る迷惑に思ふ所なり。余は從來の經歷に概念の必要を認められ、枝葉の穿鑿を抛棄したり、左れど余が想設する景象は、隨分天理にも協ひ人性にも合したりと信せり。人の頭腦は時計の齒車仕掛と異れば、其機能は分解し得べくもあらず、殊更藝術家の意中では捕捉し難きものにて、其作物の實相以外に、一種の學理と目的とを具へたりと思ふは甚だき誤解にして、

學理は各人の性情に存し、旨趣は平易の常感より發揚す、畫幅を觀て藝術を解せんとならば、須らく正面に立ちてこれを熟視すべし、裏面に廻りて詮索せんと欲するなかれ、畫人は畫幅以外に匿す所なければなり」と、此語は實に世の美術を論ずる者が、揣摩の臆説を誇張するを斥けたり。今此偉人の經歷と所作の蹟とを尋ねて、至大の才能、最優の理想を運用するに、誠心と勤勉とを以てしたるを證し、創作的能力の條項を究めて、彼が特有の資質を推定せんと欲す。

(二) 審美上の主義

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌが懷抱する美術上眼目の主義は、美術家は其心に感じて述んと欲する事ありて、其事の必要已む能はざるを胸中に確認し、カントが所謂「道念の必然なる大法」を發表するにあらざれば筆を執るべからずといふにあり。其確信一たび定りては如何なる困難をも凌ぎ幾多の障礙に遭ふても挫折することなく、これを發揚するに一時も躊躇せざらんこと。美術家が社會に負ふ所の責務なりとす。故人ミレは曾て言へり、「世に美といへる事を寫し出したる様々の物は、美術家がこれを寫し出さんと欲する意向の止み難きに較ぶれば、左程にもあらず、此意向の多少こそ美術家が美をなす力量の程度を生じたり」と、此精神を推すときは、美術家が胸中の形象を開示し、又これを修正するに、美術家自らの意志より勝りたるものあるべからず、ミレは此主義を執り頑然動かさず、堅忍不撓、四十年の長き月日を獨立單行し、寂寥たる無人の曠野に、一條の直路を開きつゝ、彼は其後へと左右を顧みて己れに隨伴する人のあるやなきやを掛念せず、其前に横はる惡評誹謗の様々なるに顔を背けず、端然として廉潔爽邁なる額を擡げて進みたるもの實に彼道念の必然なる大法に順ひたるや明かなり、如何に大膽なる名利心も彼を導き支ふるに足らざればなり。

(三) 畫題の撰定

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは實に此精神の人なるを以て、揮毫の囑託を受くるにあたり、畫題の撰擇と立案の自由とは畫人の權利に屬するとして、決して他の容喙を許せず、此點に於ては彼は常に斷乎たる節操ありて、如何なる機會もこれを枉ぐる能はず、是れ毫も倨傲不遜の念を交ゆるにはあらず、彼が剛直の氣象として、美術首要の條件は自己に

依りて自己を顯し、秩序も責任も自己の誠實より出でざるべからずと確信するを以てなり、彼は此意を實行する爲めには、重大の事業をも拒絶するの已むを得ざりしこと屢ありたり。千八百七十九年ボルドオ府の商業會議院は新たにブルルス内部の改築を整へたるに當り、大階段の壁面を莊嚴する畫幅をピュヴィス・ド・シャヴァンヌに托することとなり、彼は其請囑に應じぬ。此裝飾畫の事業は美術家を満足せしむべき數多の理由を具せり、其地は美術の好尚ある富豪の大都にして、建物建築の名作なり、其壁面は建築部内の最も光榮なる場處にして、如何に壯大なる構圖も思ふまゝに展舒し得べき面積を有す。斯くて彼は此計畫に最も適應したる考案を搜索しつゝありける半に、商業會議院より一片の設計規定書を送り越したり、そは官吏・學者・商人中の有力家より組織されたる委員會の決議案にして、計畫の詳細を定めたる中に、左の如くものされたる一節ありたり。「詩人オーツ・ナ花弁果實など滿載したる小船に乗り、田園より歸り來り、水手等繩を執りて將に船をプニルデガラの埠頭に繋がりませう」と云々。

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは此文を見て慙慙に答へて、圖題の撰擇は他の慣例に従ひ自分に一任せられんことを希望す、追て其撰を確定したる上は直ちに報道すべしといひ送りしが、委員會の議決したる條項は變更するを得ざる旨を回答せしを以て、彼は斷然これを拒絶し遂に破談となりたりといふ。技藝家が着想上の獨立を保有し、畫題の撰定に關する容喙を拒絶するに、斯くまで強硬の態度を取らざるは、偶然の結果に任せて自信なき思想に左右さるゝは、如何なる場合たりとも良心の許さざる所なるを以てなり。裝飾畫に着手する前には建築の性質使用を熟察し、嚴密周到なる用意を以て徐ろに其目的を考査し、圓滿の調和を得たる意匠を應用せんことを期し、歴史・傳説・風土等の間然する所なき眞正の要素を協合するにあらざれば、決して筆を執らざるを常とせり。圖題の創意に自己と自覺とを顯したるは、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌが浩瀚なる總ての所作を一貫したる特色にして、毫末も他人の思考を假借し敷衍し或は翻案したるが如き迹を發見せず、偶然の事變と其紀念とは材料を資するに止り、彼は直ちに天然に向つて教誨と諮詢とを仰ぎ、戒心してこれに則り、眞に違ひ條理を失はざるを唯一の心掛となす、彼が寫し現したるものは實に世にあるべく又あらざるべからざることをのみなり。

